



Book Talk



編集・発行 海南高校図書館
第9号 2011. 07. 07.

人生に通過儀礼（七五三や入学式・成人式など）のあるごとく、読書にも誰もが通る道がある。幼い頃、『桃太郎』や『浦島太郎』など日本の昔話を読み聞かせてもらう。小学校に入ると『ごんぎつね』や『タヌキの糸車』など教科書版名作を読む。やがて、（半強制的にはあるが）野口英世やエジソンなど世界の偉人と出会う。この辺から読書反抗期が始まるが、高学年になると男子は（女子のことは知らない）、一度は必ず『シャーロック・ホームズ』を読み、のめり込む奴は『怪盗ルパン』まで深入りする。そして、中学・高校で文庫本の世界に入る（もちろん、この間読書から離れていく奴もいるが）。『坊っちゃん』『伊豆の踊子』『老人と海』などの古典？から『赤頭巾ちゃん気をつけて』『限りなく透明に近いブルー』『風の歌を聴け』などの現代小説（私の時代の現代であります）、松本清張・横溝正史・クリスティらの推理小説などなど乱読の時代に突入する。この乱読が大切だ、ためになる本いい本だけを読むっていうのはどうか（だいたいいい本って何？）、有害図書も低俗本も読む、芥川賞も直木賞も読む、源氏物語や哲学書もかじる、とにかく気を引かれた本を片っ端から読む。そうしないと大切な本とは出会えない。頭が心が鍛えられない。喜怒哀楽の怒と哀が抜けると喜楽人間になってしまうように。だから、乱読を勧める（生徒諸君、乱読の時代に進め！）。やがて、アイデンティティができあがってくると、読書にも落ち着きができ好きな作家やジャンルのものを選んで読むようになる。



乱読のすすめ

奥野先生の熱血爽快トーク その1

しかし、この読書の通過儀礼が昨今怪しい。たぶん、そのうち『金太郎』や『一寸法師』を知らない小学生（もっと怖いのは知らない親）、キューリー夫人やワトスンに会ったことのない中学生がでてくる。これは、やはりまずい。成長していく上での通過儀礼なのだから。

自分の歩んできた読書の道を少し振り返ってみる。日本昔話は一通り読み聞かせてもらい成長。大好きだったのは地元で伝わる『大人（おおびと）の話』——こちらの山と街道を挟んだ向こうの山をまたいだ大人、山の頂上にその足跡が残っている——早速、足跡捜索隊を結成した。

教科書の『ちび黒サンボ』が大好きで『フランダースの犬』に涙し、母が買って本立てに並べた世界偉人伝シリーズは開かず、『まだらのひも』『赤毛連盟』『踊る人形の秘密』などにわくわくした小学生時代。ルパンよりもホームズ！泥棒が活躍するのが納得いかず、正義は勝たねばならないと堅く信じていた頃。（白黒の二元論世界は単純でいいな。それから、今回黒江小学校図書館のシールが貼ってあるシャーロック・ホームズ全集の1冊を本棚から発見、時効）

そんな中で、『不思議の国のアリス』は読後の余韻が今も蘇る、「怖い！」その気味の悪い不思議さにうなされた。でも、今も繰り返し映画になるくらいだから、色あせない摩訶不思議さをもつ名作（高校生になって文庫本でも読んだが、やっぱり怖かった）。ルイス・キャロルは天才だ！

文庫本デビューは早くなかった。本を買う金がなかったし、もったいないと思ってた。でも、4つ上の兄が文庫本を読んでいるのをかっこいいなと思い、兄の本棚から借りたのが『アルキメデスは手を汚さない』（小峰元・講談社文庫）。これがすごくおもしろく、読書に感動！（このシリーズは続く、『ピタゴラス豆畑に死す』『ディオゲネスは午前3時に笑う』……全部読んだけどやっぱりアルキメデスが一番。それから、『アルキメデス……』は江戸川乱歩賞作品、講談社文庫からこの賞の作品が出版されている、推理小説好きにはおすすすめ）自分で初めて買ったのが『天国に一番近い島』（森村桂・角川文庫）160円也！“フランス領ニューカレドニア”ここが天国に一番近い島、どこかわかる？ 地図

帳で探せ、この本も後日映画化される。

本屋に立ち寄り文庫本の背表紙を順に眺め、気になるタイトルの本を手取る。その頃出会った本で記憶に残っているのは、『青葉繁れる』（井上ひさし・文春文庫・¥200）、『敗れざる者たち』（沢木耕太郎・文春文庫・¥320）、『オリンポスの果実』（田中英光・新潮文庫・¥140）、『二十歳の原点』（高野悦子・新潮文庫・¥220）、『アクロイド殺害事件』（クリスティ・創元推理文庫・¥300）、『長距離走者の孤独』（アラン・シリトー・新潮文庫・¥280）などなど。今も本棚に並ぶ。（※金額は当時購入時のものです）

読書量が一番多かったのはやっぱり大学生の頃、金も彼女もないが暇だけはあったから、とにかく文庫本をよく読んだ。サッカーをやっているか四畳半一間の下宿で文庫本を読んでいるか。京都の夏は暑く狭い下宿にはおられず涼みがてらに映画館へもよく行った。料金の高いロードショウ映画館ではなく、古い映画を3本立てぐらいで上映している安い祇園会館や千本日活へ。文庫本と映画、この二つから人生を学ぶ。目には見えない大切なものがあることを、かっこよく生きるってどういうことかを教えてもらった。頭が鍛えられた、心が鍛えられた。

今も本屋によく行く。眺めているだけで楽しいし、たくさん本が整然と並んでいるのは気持ちがいい、本屋の雰囲気は好きだ。映画館へも時々行く、夫婦で行くと2,000円。最近観たのは「阪急電車」、原作本の『阪急電車』（有川浩・幻冬舎文庫・¥560）是非読んでみて。映画の感想は「あんなに凛々しくかっこよくいきたいなあ、自分は未熟だなあと次は四条河原町を舞台にした『阪急百貨店』を書いてほしい」（有川さんよろしく）。

今回は、感情移入しのため込んでいった本や強く影響を受けた本、大好きな作家の紹介。乞うご期待！

追伸 ～ちょっといい話～

文庫カバー 作家一筆の支援

東日本大震災で被災した書店を支援するために、大阪の書店関係者が人気作家の支援メッセージ入りブックカバーを作成した。関西各地の協力書店で文庫本を買ったとこのカバーをかけてもらえる。6月に始めた第1弾が好評で、7月25日にはさらに6人のメッセージが登場。全国の書店にも支援の輪が広がる。

「私たちは雲外蒼天を信じて生きる」。こんなメッセージとイラストを描いたのは、時代小説「みをつくし料理帖」シリーズで人気の兵庫在住の作家、高田郁さん。困難を乗り越えれば青空が見える、という意味だ。阪神大震災で被災した高田さんは「人生を立て直すには長い時間がかかることを学んだから、『がんばろう』でもない、息の長い支援への思いを託した」。大阪の書店経営者でつくる「大阪トーハン会」の呼びかけに、無償で協力した。ブックカバーの購入費の一部が被災書店への義援金になる。第2弾として、「阪急電車」の有川浩さん▽「悪の教典」の貴志祐介さん▽「永遠の0」の百田尚樹さん▽直木賞作家の道尾秀介さん▽コラムニストの勝谷誠彦さん▽「星守る犬」の漫画家、村上たかしさんの6人が登場。（朝日新聞6月17日より）



（奥野昌紀）